



現代短歌分類辭典

第三卷

津端修編纂

津端 修 編纂

現代短歌分類辞典

第三卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

3

昭和三十六年四月三十日再版発行

定価 四〇〇円

著者兼
発行者

津 端 修

東京都文京区西江戸川町一八

整版者 柿崎政之助

東京都台東区鳥越町一ノ一五

印刷者 津 端 亨

東京都中野区上高田一ノ一三

発行所 イソラベラ社

振替東京六七三四一番

凡 例

一、明治、大正、昭和の三代に詠まれた主要な歌十六万首を分類した。

一、分類の基準は大体単語を中心としたが、二単語以上に及ぶ場合は、——を挿入して単語の境界線を示しておいた。

一、単語には、ことごとく品詞名をつけた。

一、単語の排列は、五十音順に従った。

一、歌は原作の仮名遣いに従った。

一、単語の説明は、新仮名遣いに従った。

目次

あかつき (結句止)	一五	歌數
— 起きし	二	
— かけて	一六	
— 来る	二	
— 闇き	二	
— 暗し	二	
— 寒し	五	
— 覺めて	四	
— し	一	
— しらぬ	一	
— 清し	三	
— 近き	六	
— 近く	五	
— 近し	五	
	一	頁數
	二	
	三	
	四	
	五	
	六	
	七	
	八	

と	一〇	歌數
— 一〇	九	頁數
に	一〇	
— 一〇	七	
に	五	
— 一〇	七	
の (連体修飾語)	四	
— 四	四	
の (連用修飾語)	七	
— 七	六	
は	二	
— 二	八	
ばかり	一	
— 一	八	
早き	四	
— 四	六	
早く	八	
— 八	六	
深く	二	
— 二	九	
降りし	二	
— 二	〇	
まで	二	
— 二	〇	
も	八	
— 八	七	
や	六	
— 六	一	

暁月夜
 暁空
 あかつきしほ
 垢づきし
 暁ぐも
 暁方
 暁風
 暁かけ
 暁起
 暁海
 あかつき荒れ
 暁天
 あかつき雨
 — (その他)
 — を
 — より
 — よ

	歌數	頁數
暁月夜	三	〃
暁空	四	九〇
あかつきしほ	一	〃
垢づきし	六	八九
暁ぐも	三	八八
暁方	四〇	〃
暁風	一	八四
暁かけ	一	八二
暁起	二二	〃
暁海	一	〃
あかつき荒れ	一	八一
暁天	一	〃
あかつき雨	一	八〇
— (その他)	三七	七七
— を	四八	七三
— より	七	〃
— よ	一	七二

暁露
 垢づきして
 あかつきどき
 暁床
 暁風ぎ
 暁庭
 垢づきぬ
 あかつき人
 あかつきまりで
 あかつき道
 暁水
 暁森
 暁山
 暁園
 赤髪
 垢づけーる
 あがつーた

	頁數	歌數
暁露	五	九一
垢づきして	一	〃
あかつきどき	一	九一
暁床	一	〃
暁風ぎ	一	〃
暁庭	一	〃
垢づきぬ	一	〃
あかつき人	二	九三
あかつきまりで	一	〃
あかつき道	一	〃
暁水	一	九四
暁森	一	〃
暁山	一	〃
暁園	一七	九四
赤髪	一	九六
垢づけーる	三	〃
あがつーた	三	九七

あがつーたら	一	〃
赤土	一二五	九八
赭土色	一	一〇八
赤土原	一〇	〃
赤土路	一五	一〇九
赤土山	六	一一一
紅躑躅	二	一一二
あがつーて	四	〃
赤椿	二四	一一三
あーがー妻	一二	一一五
吾妻川	七	一一六
吾妻山	一八	一一八
あがつま少女	一	一二〇
赤面	一	〃
飽かーで	三	〃
赤電車	六	一二一
赤とー藍	一	一二二

赤とー青	四	〃
赤唐辛	四	〃
紅どろだん	一	一二三
あかとき(結句止、三句止)	六	〃
かけーて	五	一二四
寒く	二	一二五
寒し	二	〃
近く	五	〃
と	一九	一二六
に	一九	一二八
にーして	六	一二九
の(連休修飾語)	一九	一三〇
の(連用修飾語)	二	一四一
は	二	一四二
も	一	一四三
ゆ	一	〃
を	三七	〃

— (その他)

	歌數	頁數
あかとき雨	一九	一四七
あかとき馬	二	一四八
あかとき起き	一	一四九
あかとき起き	五	〃
あかとき沖	一	一五〇
あかとき風	二	〃
あかときた	六	〃
あかとき峽	二	一五一
曉天鴉	一	〃
あかとき雲	一	〃
あかとき醒	一	一五二
あかとき潮	一	〃
あかとき霜	二	〃
あかとき空	五	〃
あかとき月夜	一	一五三
あかとき露	一	〃
明時庭	一	一五四

	歌數	頁數
あかとき水	一	〃
あかとき諺	一	〃
あかとき山	一	〃
あかとき闇	五	一五五
あかとき雪	一	〃
赤—と—黒	一	一五五
赤—と—白	四	一五六
赤トマト	一	〃
赤鳥居	二	〃
赤泥—の—土	一	一五七
赤とんぼ	三	〃
赤とんぼ	九	〃
赤とんぼ	三	一六〇
赤名峠	七	一六一
赤糞山	四	一六二
飽か—な—く	三	〃
飽か—な—く	八	〃
開か—な—く	一	一六六
飽か—な—く—に	一	〃

開か—な—く—に	一	〃
赤茄子	八	一六九
あがなは—む	二	一七〇
贖ひ	一	一七〇
購ひ	七	〃
購ひ—し	四	一七一
購ひ—て	五	一七二
購ひ—に—けり	一	〃
購ふ	三	一七三
購へ—る	一	〃
赤丹	一	〃
赤濁り (名詞)	四	一七四
赤濁り (動詞)	一	〃
あかにごりし—て	一	一七五
赤濁りせ—り	二	〃
あかにごりせ—る	一	〃
赤濁り—たり	一	一七六
赤濁り—つつ	一	〃

赤濁る	七	一七六
赤濁れ—る	一	一七七
赤丹—の—頬	一	〃
赤丹頬	一	一七八
開か—ぬ	三	〃
飽か—ぬ	二〇	一七九
飽か—ぬ—かな	三	一八三
飽か—ぬ—かも	三	一八四
飽か—ぬ—け	四	一八九
飽か—ぬ—なり	一	〃
飽か—ぬ—に	二	一九〇
赤布	一	〃
赤沼—の—原	一	〃
開か—ぬ—もや	一	一九一
赤ぬり馬車	一	〃
飽か—ぬ	二	〃
明か—ぬ	一	一九二

茜	一〇六	歌數	一九二	頁數
茜蜻蛉	一		二〇一	
茜色	九		〃	
飽かーねーかも	一		二〇二	
茜雲	二七		二〇三	
茜ーさす	七八		二〇五	
あかねさび	一		二一三	
茜して	二		〃	
あかねしーぬ	一		〃	
茜す	一		二一四	
茜せーり	一		〃	
茜せーりーけり	二		〃	
茜空	三		二一五	
飽かーねーど	二		〃	
飽かーねーども	一		二一六	
あかねばみーたる	一		〃	

吾野ーのー川	一	歌數	二一六	頁數
赤のまんま	五		二一七	
阿賀ーのー港	一		〃	
紅羽	一		二一八	
開かーば	一		〃	
飽かーば	二		〃	
厭かーは	一		二一九	
紅萩	七		〃	
赤禿	三		二二〇	
赤禿ーし	二		〃	
赤旗	二四		二二一	
あかはた	二		二二三	
赤肌	一〇		〃	
赤膚	五		〃	
赤裸	一		二二四	
赤はだかなる	四		二二五	
赤蜂	五		〃	

赤斑	朱海膽	赤人	赤彦	赤光	紅薔薇	あかはらつぐみ	赤腹	赤ばめーる	あかばみーぬ	赭ばみーにーけり	赤ばみーて	赤羽根橋	赤羽	赤埴	赤鼻	赤花
一	二	八	一七	一	四	一	三	一	一	一	二	一	一〇	二三	二	二
二三八	二三七	二三六	〃	二三三	〃	二三二	〃	〃	二三一	〃	〃	二三〇	二二八	〃	〃	二二六

赤松山	赤林	赤松	赭斑	赤本	紅ほほづき	あか星の	明星	あか埃	赤帽	赤禪	赤風呂敷	紅芙蓉	赤ふどし	赤不動	赭富士	赤房
三	一一	一七	一	一	一	一	二	一	一	一	一	六	一	三	一	二
二五五	二五三	〃	〃	〃	二四三	二四二	〃	〃	二四一	〃	二四〇	〃	〃	二三九	〃	〃

赤麻沼	一	二五五
赤間関	二	二五六
赤飯	二	〃
赤まんま	六	二五七
赤味	二〇	〃
紅み	八	二五九
赤みーかも	一	二六〇
あかみそめーつつ	一	二六一
あかみーたり	一	〃
楮みーたる	一	〃
あかみーたろーらし	一	二六二
赤みーたるーらむ	一	〃
赤水	一	〃
紅みーつつ	二	〃
赤みーて	四	二六三
あかみーと	一	〃
明みーぬ	一	二六四

赤味ばしれーる	一	二六四
あかむ(終止形)	一	〃
赤む(連体形)	五	二六五
飽かーむ(連体形)	一	〃
飽かーむ(終止形)	五	二六六
赤紫	二	〃
あがむる	一	二六七
赤芽	一〇	〃
あかめ	二	二六八
赤芽解	四	〃
赤目柏	八	二六九
あがめーけむ	一	二七〇
あかめーけり	一	〃
赤芽ざくら	一	二七一
あかめーし	一	〃
紅めーて	二	〃
あがめーて	三	二七二

飽かーめーや	三	二七二
飽かーめーやーも	二	二七三
あがめーられ	二	〃
あかめーられーにーき	一	〃
あかめーり	一	二七四
あかめーる	一	〃
赤裳	七	二七五
赤毛布	一	二七六
赤藻早	一	二七七
あかもぢ	一	〃
赤門	一	〃
赤やけ	一	二七八
赤焼石	一	〃
赤屋根	一	〃
赭山	一	〃
赤湯地獄	三	二七九
赤口合	二	〃
合計	二、四六三首	

作家表	二八〇
推奨のことば (立岩 茂)	二九〇
同 (長沢美津)	二九二
二荒山神社短歌文庫に 就て (高橋城司)	二九三
編纂おぼえ書	二九五
正誤表	二九七

あかつき 【名詞】「曉」

あかつきが結句止をしている歌。夜の明くるころ。よあけ・あけがた。上代の呼称「あかとき」と同じ。地平線下の太陽から東天高い空中の細塵にあたる光が、拡散されて薄明を漂わす頃をさすもので、曆面では地平線下十八度まで太陽の上つた時を薄明の始まりとし、その時を夜明けと呼んでいる。更にその前でも微かな薄明はあり、また空模様で幾分の差はある。

あらがねの香のする水に面あらふ支那千山のひとつあかつき

齋藤 茂吉

いささかの医療器械をさがしゆく貧しき町の夏の曉

尾上 柴舟

入海の竹島の橋踏むことを試みぬべき秋のあかつき

與謝野 晶子

朧なる光を頼み髪結ふと鏡をぬぐふ寒きあかつき

若浜 汐子

ここちよく高く風鳴る一もとの檜のもとを歩むあかつき

與謝野 晶子

静かなる光のなかにうすいろの花を見て立つ夏の曉

尾上 柴舟

あかつき

あかつきーおきーし

縦横に轍のふかくきぎみつく砂地しめれり冬のあかつき

洗面器に汲みたる水に砂粒のしづまりゆけり寒きあかつき

敕封たかなの箏たかなの皮切りほどく剪刀とさみの音の寒きあかつき

東海が夜通し雨を巻き入れて藍黒色となれるあかつき

とよみつつ爲事場にはやもひとあらむ海苔きる音のひびく曉

庭さきの松の秀ずゑの雪落す小鳥のふりの寒きあかつき

齒のこぼれ嘆きし夢に覚めてより長しとおもふけふの曉

ひとつある岡にのぼらむと思ひけり野分すぎたるけさのあかつき

目の前にむさし野ひらけちちぶ嶺の起きそむるところ春のあかつき

あかつきーおきーし 【名詞・動詞・助動詞】「あかつき起きし」

たちゆくにあかつき起きし廊下より今日は晴れなむ山の空見ゆ

田くろの畔くろに咲けるなづなの白き花曉おきし露にまぎれつ

鹿兒島壽藏

鹿兒島壽藏

森 鷗外

與謝野晶子

藤 森 朋夫

捫 垣 青花

吉川金一郎

齋 藤 茂吉

依 田 秋圃

柴生田 稔

都 筑 省 吾

あかつきーかけーて 【名詞・動詞・助詞】

「かけ」は、カ行四段活用の連用形。「て」は接続の助詞。〔新古今集、十七〕――

沖つ風夜半に吹くらし難波瀉あかつきかけて波ぞ寄すなる（權中納言定頼）〔玉葉集

、四〕――深山路や曉かけてなく鹿のこゑするかたに月ぞかたぶく（土御門天皇）。

〔拾遺集、二〕――み山出でて夜半にやきつる時鳥曉かけてこゑのきこゆる（平兼盛

朝窓に髪をすきつつおもかげに曉かけてみし夢を追ふ

中村好美

あらぬ物曉かけて見え来るに枕返して顔を背^{そむ}けぬ

宇都野研

歌人の竹の里へ世を去るとあかつきかけて月冴えにけり

三木緋佐

海戀し海恋しとや啼く鷗あかつきかけて風の吹きいづ

金子薫園

機関車の蒸気たぎりくるおと近くあかつきかけてひと夜眠らず

土岐善麿

菊照らす月の光は明かく澄み曉かけて霜むすぶべし

久保田不二子

さむざむと曉かけてりまるする吾が妻と兒の命なりけり

丸山芳良

あかつきーかけーて

あかつきーきたる

しらじらと煙ながるる星空は曉かけて霧こめにけり

土岐善鷹

瀬野すぎて河内三原のあたりには曉かけて雪ふりにけり

加藤章三

達磨寺目無し達磨の本市もとまちは曉かけて夜もすがらあはれ

北原白秋

月光に冴えしづもれる夜半の道あかつきかけて置きわたす霜つはぐりか

宮柁二

燕つはぐりに連なる獄の山の空あかつきかけてよく冴えにけり

森二郎

年あけてただしづけしと幾夜さを曉かけて机にむかふ

柴生田稔

鶏の初鳴声を待ちゐしにあかつきかけていつか眠りし

君島夜詩

眠れるや覚めてしありや差櫛のあかつきかけてうつつなのわれ

九条武子

氷雨に一夜あり來し山西さんせいのあかつきかけて雲灼くる道

宮柁二

あかつきーきたる 【名詞・動詞】

岩群の立てる岬に寄る波のしろじろ見えて曉来る

扇畑忠雄

ひと夜わが眠らざりし旅館やど苦しき苦しき鋭き冬の曉きたる

前田夕暮